

内視鏡的逆行性胆道膵管造影(ERCP)

●ERCPとは

内視鏡的逆行性胆道膵管造影(ERCP : endoscopic retrograde cholangiopancreatography)とは、特殊な内視鏡を口から挿入して十二指腸まで進めて胆管・膵管の出口(乳頭)から細いチューブを挿入して造影剤を注入し検査をしたり、結石を除去したり、ステントを挿入したりする検査・治療です。1970年から各国で行われていますが、レントゲンと内視鏡を組み合わせた治療でありCTやMRIでは分からないことも直接的に検査が出来るため非常に有用な方法です。ERCPを行うことで従来手術が必要であった病気も内視鏡で治療ができるようになり、最短2泊3日で退院することが出来ます。o

●ERCPで行う検査

造影剤を胆管、膵管に注入しその形をレントゲンを用いてリアルタイムで見て、狭窄や結石がないかなどを確認します。



ERCPでの胆管・膵管像

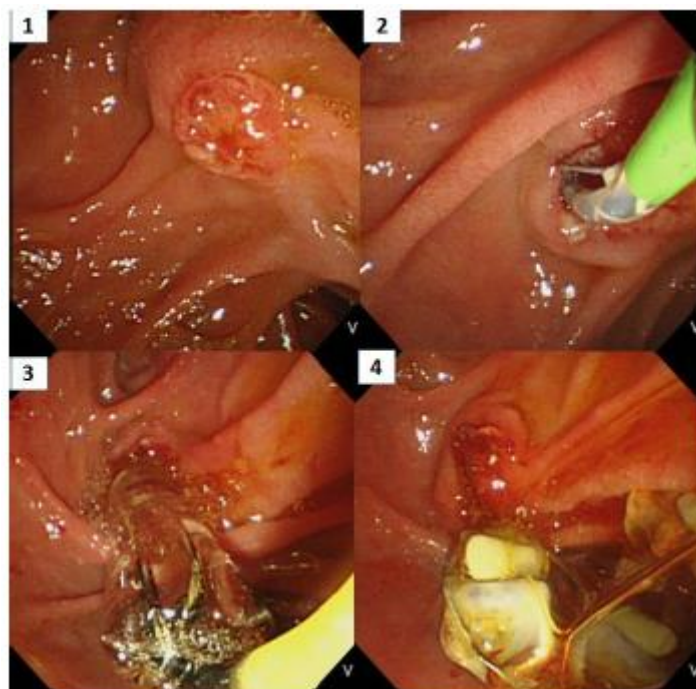
がんが疑われる時は胆管や膵管の組織を採取してがん細胞の有無を確認することが出来ます。また、胆管がんの時などには複数箇所から組織を採取したり、先端から超音波が出る細い機器を中に入れてがんの広がりを手術の前に確認することもできます。

ERCPでの治療

ERCPでの治療は多岐に渡っています。鎮静薬を用いて内視鏡で行いますので目が覚めた時には終わっています。所要時間は10分から60分程度のことが多いです。

結石除去術

総胆管結石や膵石といったものであればERCPを行うことで除去することが可能です。上記の様にこのような病気を以前は外科手術を行っていました。外科手術に比べると体への負担が非常に低く最短で2泊3日で行うことができます。



総胆管結石治療の手順

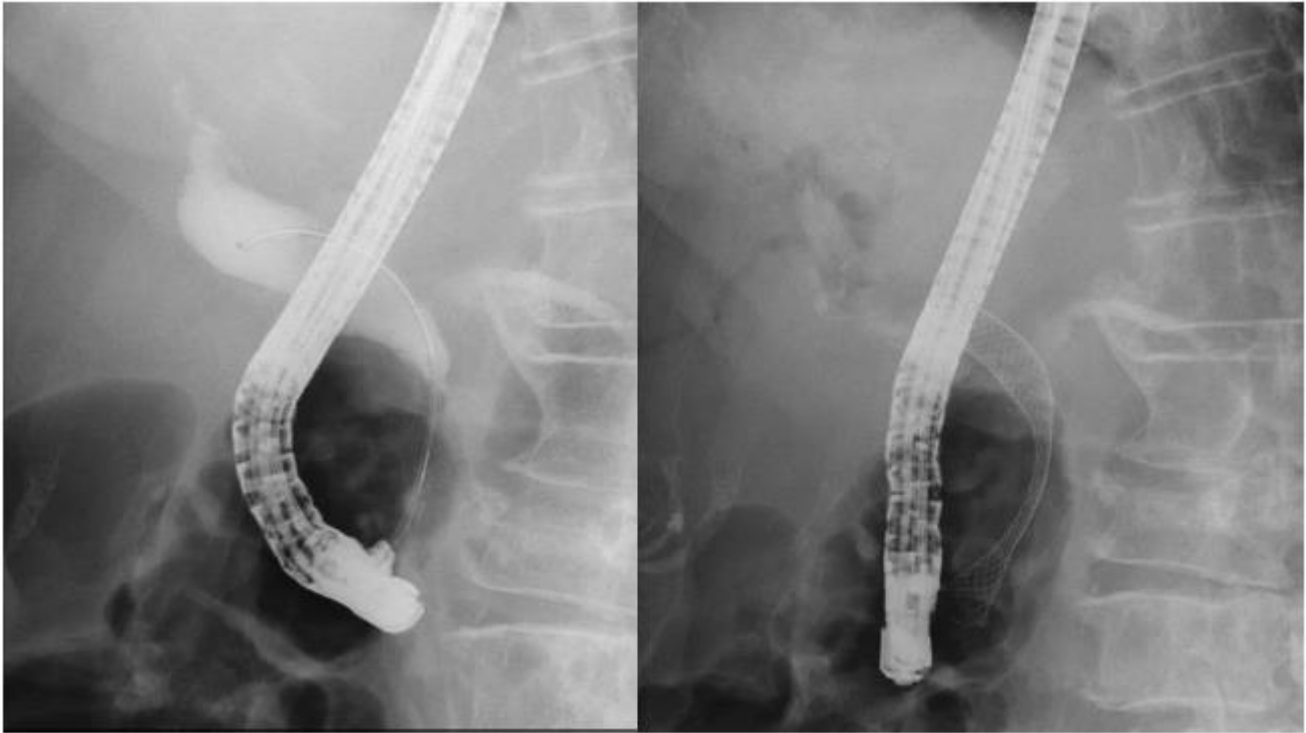
ステント留置術

結石やがんによって胆汁が流れなくなると黄疸が生じ、そこに細菌感染が起こると胆管炎になります。胆管は肝臓の中を走行しており胆管炎になると肝内胆管から動脈に細菌が入りすぐに重症化してしまいます。そのためステントを緊急で留置する必要性があり、これを留置して胆汁の通り道を作ることで胆管炎は急速に改善します。

ステントにはプラスチックステントと金属ステントがあり、結石などの良性の病気の時やがんであっても手術の予定がある時はプラスチックステントを、がんで化学療法を行うときには金属ステントを選択することが多いですが、それぞれの患者様に応じて選択しています。



プラスチックステントによる治療



金属ステントによる治療